ペシャワール会現地活動報告会

人水命

アフガニスタン・
パキスタン北西辺境州にて

今なお、戦渦と大干ばつに苦しむアフガニスタン。ペシャワール会は、この地で、さまざまな困難を乗り越え、27年にわたって支援活動を続けてきました。
今回は、看護師として現地で18年間医療支援に取り組み、中村哲医師を支えてきた藤田千代子さん（2010年3月第38回医療功労賞・海外部門受賞）をお迎えして、アフガンの現状と人々の思い、国際支援のありかた等をお話していただきます。

日時：**10月30日**（土）午後1時～3時
場所：**せんだいメディアテーク**
7階スタジオシアター
入場 無料

主催：ペシャワール会をみやぎから応援する会
財団法人仙台国際交流協会補助事業

問い合わせ　電話 080-6055-2366
E-mail　pemiyagi@gmail.com

同時期開催　ペシャワール会現地活動写真展「人・水・命ー２７年のあゆみ」
10/13～20　仙台市福祉プラザ２階展示ロビー（18日休館日）

第38回医療功労賞・海外部門を受賞した看護師

顔

藤田（ふじた）　千代子（ちよこ）さん 51

撮影・中嶋基樹

福岡市の民間活動団体（NGO）「ペシャワール会」が建てたパキスタン北西辺境州ペシャワルの病院を拠点に、1990年から18年間、貧困層やアフガニスタン難民を看護した。

福岡県内の病院に勤めていた88年ごろ、会の現地代表・中村哲医師(63)が講演に訪れ、「イスラム教徒の衣装ブルカをかぶった女性の病気は発見しづらい」と女性の助けを求めた。「尊敬するマザー・テレサのような仕事ができると思った」。パキスタンの場所も知らずに、その場で赴任を申し出た直情家だ。

男女隔離のイスラム社会。女性患者を一手に引き受けた一方で、男性の患者や職員には手こずった。笑いかけても見つめてもだめ。「ガミガミ言うことにした。真剣さが伝わって信頼が深まった」

1日200人の患者を世話し、病人が待つ山村を馬で巡回した。その後現地の治安が悪化、一昨年に一時帰国した。劣悪な医療環境を思い、患者を置き去りにした気分だった。

現在、福岡市のNGO本部から電話で現地を指揮する。「じれったい。戦火がやめば飛んで行きたい」と苦しい胸の内を明かす。

（西部社会部　豊浦潤一）